

— 次の①～⑩の——の漢字の読みをひらがなで答え、カタカナを漢字に直しなさい。

- ① 平易な文章を書く。
- ② 節穴から光が差しこむ。
- ③ 城を築く。
- ④ 父はテンケイ的なマイホームパパだ。
- ⑤ 映画をヒビョウする。
- ⑥ この仕事をこなすのはゾウサもないことだ。
- ⑦ 同窓会でキュウコウをあたためる。
- ⑧ 経済成長を政策のシュガンとする。
- ⑨ 飼い犬がアバれる。
- ⑩ お墓に花をソナえる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、すべて句読点・記号をふくむものとする。)

僕(ぼく) 小木文弘(ふみひろ)ブンちゃん、根岸雄二(ねぎし ゆうじ) (雄ちゃん)、金子司(かねこ じ) (つーやん)の三人は、五年生の夏休みに工場の跡地(あとち)にあるという不発弾(ふはつだん) (＝発射または投下されたが、破裂(はれつ)しなかった砲弾や爆弾)を探索(たんさく)する冒険を計画する。この準備の途中、ひよんなことから、転校生の高井和彦(たかいわかつひこ)が加わるようになった。ところが開始早々、僕は雄ちゃんと仲たがいをし、雄ちゃんは帰ってしまう。僕は自分だけで探すと宣言(せんげん)してしまうが、一人ではやる気が起きず、だったらと三日が過ぎてしまった。

自転車(じてん차)が庭先(にわさき)に入(はい)ってきて、ブレーキを掛(か)ける音がした。近所(きんじよ)の人がやってきたのだと思った。

「あー、すみません」

玄関(げんかん)先の祖母(そぼ)に話し掛(か)ける声(こゑ)に①僕は驚(おどろ)いた。その声(こゑ)は高井(たかい)の声(こゑ)に間違(まちが)いなかった。

「小木(こぎ)くん、いますか？」

「フミかい？ いるけど……」

「あ、小木(こぎ)くんと同じ(おな)クラスの高井(たかい)と言(い)います」

「あれま、すっかりした物(もの)言(い)いだね。ちよつと待(まち)っててね、今(いま)、呼(よ)んであげるから」

僕は祖母(そぼ)に呼(よ)ばれる前に、自分(おれ)から基地(きち)を抜(ぬ)け出(で)して縁側(えんがは) (部屋(へや)の外側(がわがは)につくった細長(こびさ)い板(いた)じき)に出(で)た。

「小木(こぎ)くん」

「おう、高井(たかい)」

僕はこつちにこいよと、手招(てまね)した。

祖母(そぼ)は僕(ぼく)に近(き)づく「見(み)かけない子(こ)だね」と小聲(こゝろ)で訊(き)いた。

「ああ、東京(とうきやう)からの転校生(てんがうせい)だから」

「そうかい。道理(だうり)でこの辺(へ)りの子(こ)とは感(かん)じが違(ちが)うと思(おも)ったよ」と言(い)うと、祖母(そぼ)は家(いえ)の奥(おく)に行(い)った。

「よくオレンち分(わ)かったな？」

「学級名簿(めいぼ)で調(しら)べた。でも、ちよつと分(わ)かりづらかったけど、あとは勘(かん)で」

高井(たかい)はそう言(い)いながら、何気(なんき)なく家(いえ)を見回(みわ)した。洒落(しやれ)た高井(たかい)の家(いえ)とは似(に)ても似(に)つかない古(ふる)い家(いえ)だ。恥(は)ずかしい思(おも)いがした。

「ボロいうちだろ」

「いや、うちよりずつと広(ひろ)いし、庭(にわ)だつて大(お)きい」

②高井(たかい)が咄嗟(とつさ)に(＝瞬間(しゅんかん)に)氣遣(きづか)ったのが分(わ)かった。

「お前(まへ)、よく家(いえ)を抜(ぬ)け出(で)せたな？」

「母(はは)さんが買(か)い物(もの)に出(で)た隙(すき)に」

「大丈夫(だいじやうぶ)なのかよ？」

「やることはやつてるし。ただ、あれから、あんまり口(くち)をきいてくれないけどね」

あの母親(はは)ならそういう態度(たいど)もとるだろうな、と高井(たかい)に同情(どうじやう)した。

「でも、煩(うる)くなくつていいよ」

たぶん強(か)がりと言(い)っているんだ。

「ふーん、そうか。で、何(なに)の用(よう)だ？」少しぶつきらぼうに訊(き)く。

「不発弾(ふはつだん)探(た)しはやつてるの？」

「ああ、ちよつとは行(い)ったけど、昨日(けふ)と今日(けふ)は行(い)ってない。作戦(さくせん)を考(かんが)えてるんだ」

さすがに全然(ぜんぜん)行(い)っていないとは答(こた)えづらく、嘘(うそ)をついた。

「ふん、だと思(おも)った」

以前(いぜん)よりは打(うち)ち解(と)けたとはいえ「お見通(みとお)しだよ」といった③鼻持(はなもち)ぢならな感(かん)じがやつぱりする。

きつと、僕の嘘(うそ)も見抜(みぬ)かれてるのかもしれない。そう思(おも)うと余計(しやく)に、癪(しゃく)に障(さ)る(＝腹(はら)が立(た)つ)。

と、祖母(そぼ)が丸(まる)いお盆(ぼん)に切(き)ったスイカを載(の)せて運(は)んできた。

「あんまり冷えてないけど、それでも食べな」

僕はスイカを挟んで縁側に並んで座った。僕は裸足の脚をぶらぶらさせた。

「スイカ、喰えよ」

「うん、じゃあ。いただきます」

僕らはスイカに手を伸ばし、それを口に運んだ。祖母の言うように冷え冷えではなかったが、かなり甘くて美味しい。三日月に切ったスイカに歯形が付き、両方のほつぺたに汁が流れた。

「④根岸くんに連絡した？」

僕はかぶりついたスイカの種を口の中で選り分けると、ほつぺたを膨らませて庭の遠くへ種を吹き出した。

「してない。向こうからだってこないし」

高井はスイカの種を手のひらに出すと、それをお盆の隅に丁寧に置いた。

「みんなで不発弾探し再開しよう。藪の中だって探せばいい。ちゃんと蚊に喰われないように長袖のシャツとか着て、薬も用意して。それと、意地を張ってないで、根岸くんも誘ってさ」

「意地なんか張ってねーよ。それに悪いのは雄ちゃんだし。なんで、オレが謝んなきゃいけないんだよ」

「小木くんは謝れなんて言ってるだろ。でも、みんなでやった方が効率もいいし、それに……」と、高井は言葉を切った。

「それに、なんだよ」

「それに……。みんなと一緒にの方が楽しいだろう？」

雄ちゃんに意地悪されていた高井が、一緒の方が楽しいなんて。僕は黙ったまま、また種を吹き出した。

「根岸くんは、確にお調子者で、すぐ怠けるし、気分屋だと思うよ。それに、僕のことは嫌いだろうし……。でも、小木くんとはずっと友達なんだろう？」

「うん、まあ。幼稚園のときからな」

「だったら、余計だ」

「お前が気にすることじゃねーよ」

縁側の前には、種を目当てに蟻が群がり始めていた。

「羨ましいって思ってたんだよね」

「はあ？」

思わず⑤スイカを口に運ぶ僕の手が止まった。

「教室でもどこでも、君ら、いつも三人で楽しそうじゃないか」

「お前は迷惑そうな顔してたじゃねーか」

「ああ、あれはポーズさ」

僕が⑥拍子抜けするほど、高井はあっさりと答えた。

「なんだ、それ？」

「僕は小さい頃から、習い事ばかりやらされてたから、放課後、誰かと遊ぶこともなかった。クラスメイトはいたけど、気づいたら仲のいい友達がいない。こっちに転校してきても、実は一年で戻るって決まってるし。それに転校生だろ、仲間外れにされるのが厭だったんだ。どうせ、仲間外れにされるなら、自分から近づかないようにした方がカッコ良く見えるかなって思ってたんだ。ほとんどの男子からは嫌われると思ってたけどさ。でも、君らがふざけると楽しそうで、羨ましくてさ。なんかそんなの見ててムカツとすることもあったし、バカだなあって思うこともあったけどさ。ほら、池跳びだって」

「バカで悪かったな」

「でも、一緒に磁石取りに行ったり、不発弾探ししたりするのって面白かった。友達と遊ぶのって楽しいんだなって。ほら、小木くんがさ、お前も仲間だって言ってくれただろう。嬉しかったな。だから、続けたんだよ、仲間で不発弾探し」

以前ならきつと、キザなヤローだとムカついたのだろうけど、高井は妙に素直に喋っている気がした。

「だから、根岸くんと仲直りしろよ。根岸くんが僕を嫌ったままでもいいからさ。明日は登校日だし、どっちみち学校で顔を合わさなきゃならないんだから」

「ああ、考えておく」

僕はそう言っていると、またスイカの種を遠くへ吹き出した。

高井が帰って昼ご飯を食べてから、しばらくゴロゴロしていたけど、どうにも高井に言われたことが気にかかって、僕は起き上がった。

「ああ、もうっ、くっそー。ちょっと行ってみるか」

謝るんじゃない、ただ様子を見に行くだけだ。僕は自転車に跨またがって雄ちゃんちへ向かった。気が進まない分、漕こぐペダルは重く、照りつける太陽が憎にくらしく思えた。

雄ちゃんちが近づくとき、ゆっくりとペダルを漕いだ。

もし会ったら最初になんて言えればいいんだ？

僕は言葉が見つからず、そのまま雄ちゃんちの前を通過した。そして角を三回曲がって、もう一度、雄ちゃんちの前に回り込んだ。でも、⑦また通過した。

向こうから僕を見つけてくれて声を掛けてくれないかな。そんなことを考えた。同じ道をぐるぐると四周しかけたときだった。

雄ちゃんちの玄関扉げんかんとびらが開いて誰かが出てきた。雄ちゃんのかあちゃんだ。僕はその姿に気づかないフリをして、スピードを落とすと目線をペダルの方へ下げた。

「あら、ブンちゃん」

おばさんが僕に気づき名前を呼んだ。

僕はいかにも今やってきたように、おばさんの前で自転車を降りた。

「こんにちは」と、僕は頭を下げる。

「雄二かい？」

偶然、通りかかったただだと言うつもりだったのに、つい、うんと頷うなずいてしまった。

「ごめんね、ブンちゃん」おばさんは、いきなりそう謝った。

「え？」

「ケンカしたんだって？ まったく、あのばか。ホントにごめんね」

おばさんはパーマのかかったたくしやくしやの髪かみに手を当てながら、僕に軽く頭を下げた。

「いや、ううん、その……」

⑧予期せぬ先制パンチをまったく別の人からもらってしまった気がした。

「ちよっと待ってね、今、雄二、呼ぶから」

おばさんは、玄関から階段を見上げながら「雄二、ブンちゃんがきてくれたよ。ほら、雄二、何やってるんだい、もうっ」と、大きな声で雄ちゃんを呼んだ。

でも、二階からの返事はなかった。

「あのグズ。ごめんね、今、とっつかまえて下ろしてくるから」と、おばさんは腕うでまくりをした。

すると「オレ、会わねーから」と雄ちゃんの声が聞こえた。

「何、ごちゃごちゃ言ってるんだい、お前は」

おばさんは、玄関に立て掛けてあったほうきをぐつつかむと、勢いよくつつかけを脱ぬいで上がり端はな（＝土間や庭から家にあがつてすぐのところ）に片足を掛けた。

「おばさん、いいよ」

僕は慌あわてて声を掛けた。放っておけば、雄ちゃんはほうきの柄えで二、三発は殴なぐられそうだ。

「拗こねちまって、男のくせにみつともない。ああいうのはガツンとやんない」と

⑨ホント、いいから」僕はおばさんの袖そでをつかんで、大きく首を振ふった。

「だって、ブンちゃん」

無理矢理、雄ちゃんを引っ張ってこられても、気まずさが増えるだけだ。

「またくるよ」

「えー、そうかい、悪いね。今晚、ポカンとやつとくから、ごめんね」お婆さんは、拳を握って息を吹きかけた。

「ねえ、お婆さん、雄ちゃん、何か言ってた？」

「え、ああ」

お婆さんは、にやつと笑うと「転校生で高井くんっていう子がいるんだって？」と、訊いてきた。

「う、ううん」

「雄二が言うには、ブンちゃんがその子の肩ばかり持つ」って膨れてんだ。男のくせにヤキモチ焼いてんだね、あの子は「ヤキモチ」って。そう言われるとなぜか気恥ずかしい。

「ほら、雄二はブンちゃんのこと大好きだから」

大好きはどうか。でも、いつも一緒だったし、楽しかったことは間違いない。時々、面倒くさい存在ではあるけど。

「他には？」

「え、他に。いいや別に何も言ってなかったけど。何かあったの？」

逆に訊かれて、僕は大きく頭を振った。

（森浩美『夏を拾いに』一部改変）

問一——①「僕は驚いた」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高井は転校生なので、いつも肩を持つようにしてあげてはいるが、キザでいやなやつだと思っているから。

イ 僕の家を知らないはずの転校生の高井が、勘だけを頼りに僕の家まで訪ねて来たから。

ウ 東京からの転校生である高井は、いつも雄ちゃんと仲の良い僕の家に来ると思わなかったから。

エ やつてきたのが近所の人だと思っていたのに、祖母に話し掛ける声を聞くと、転校生で僕の家を知らないはずの高井の声に間違いなかったから。

問二——②「高井が咄嗟に氣遣った」とありますが、なぜ「氣遣った」のですか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問三——③「鼻持ちならない感じ」・⑥「拍子抜けする」の意味として、最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

③「鼻持ちならない感じ」

ア 言動が素直で思ったことをすぐ口にする様子

イ 言動がいやみでがまんできない様子

ウ 言動がすぐ核心をついてくる様子

エ 言動が腹立たしくむしゃくしやする様子

⑥「拍子抜けする」

ア はり合いがなくなること

イ ひどく驚くこと

ウ 落ちこむこと

エ 一度休むこと

問四——④「『根岸くんに連絡した？』とありますが、こう言った時の高井の気持ちを説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友達と遊ぶことの楽しさに気づき、小木にも根岸と楽しく遊んでほしいと思っている。

イ どうしても不発弾を見つけたいたので、互いに意地を張っている小木と根岸にも協力してほしいと思っている。

ウ 仲間で不発弾探しを続けたいので、小木と根岸を仲直りさせたいと思っている。

エ 仲間外れにされてきた経験から、仲間の大切さに気づき、根岸も不発弾探しに参加してもらいたいと思っている。

問五 — ⑤「スイカを口に運ぶ僕の手が止まった」とありますが、この時の僕の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高井のことを、今までは、意地悪されて気の毒な転校生だと思っていたが、素直なセリフを聞いて意外に思う気持ち。
イ 高井のことを、今までは、キザで強がりと言う転校生だと思っていたが、素直なセリフを聞いて意外に思う気持ち。
ウ 高井のことを、今までは、意地悪されて気の毒な転校生だと思っていたが、ふざけたセリフを聞いて腹立たしく思う気持ち。

エ 高井のことを、今までは、キザで強がりと言う転校生だと思っていたが、ふざけたセリフを聞いて腹立たしく思う気持ち。

問六 — ⑦「また通過した」とありますが、この時の僕の気持ちを五十字以上六十五字以内で説明しなさい。

問七 — ⑧「予期せぬ先制パンチをまったく別の人からもらってしまった気がした」とありますが、この時の「僕」の置かれている状況の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 偶然を装って雄二を訪れるつもりが、いきなり「雄二かい？」と聞かれたことでペースを乱している。
イ ケンカしたことはおばさんには知られたくなかったのだが、すでにバレていて気まずくなっている。
ウ 自分から謝らずに仲直りをしたかったが、雄二でなくおばさんに先に謝られてしまい出鼻をくじかれている。
エ 自分から先に謝ろうと思い雄二の家まで来たが、おばさんに先に謝られてしまい返事に困っている。

問八 — ⑨『ホント、いいから』とありますが、僕がこう言ったのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雄ちゃんは二階から返事をしてこないが、おばさんに謝ってもらったので、もう納得できたから。
イ 雄ちゃんがおばさんに殴られるのは気の毒だし、今会っても気持ち良く接することができそうもないから。
ウ 雄ちゃんはすねていて男のくせにみつともないし、今顔を合わせても気まずいだけだから。
エ 雄ちゃんはヤキモチ焼きで時々面倒くさい存在だし、明日登校日で顔を合わすことができるから。

三 次の文章は、ねじめ正一の『ぼくらの言葉塾』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、すべて句読点・記号をふくむものとする。）

①今、世代を超えて言葉による自己表現をしたい人が増えています。小説の新人賞の応募数はどんどん増えているし、自分史ブーム、自費出版ブームも相変わらず続いています。全国各地でさまざまな朗読会も盛んに開かれていますし、インターネットを覗けば自分のホームページやブログで詩や小説を発表する人、日記を公開する人、さらには携帯電話を使ったケータイ詩、ケータイ俳句なども生まれています。

言葉による自己表現の裾野が、かつてないほど急速に、幅広く展開しているのです。

こうした状況を、私はいいことだと思っています。海に浮かぶ氷山と同じで、裾野が広くなれば頂上も高くなり、すぐれた表現が生まれる可能性が高くなるからです。

私自身いくつかの詩の公募賞の選考委員をつとめています。ここ数年、とくに若い人の作品に、ハッとするようなすばらしい作品があつて驚かされます。

けれどその半面、表現としては上手いけどピンとこない、印象に残らない作品も多いのです。それは、その作品が作者自身の言葉で書かれていないからです。自分では自己表現したつもりでも、言葉が自分から出てきた言葉ではないために、自己表現になっていないのです。

では自分の言葉、自分らしい言葉って何でしょう。そのことを考えていく前に、ちょっと私自身の言葉体験についてお話しさせていただきます。

私は商店街で育ったまったくふつうの子どもでした。小学生の頃から店を手伝っていたので、自分の家にどのぐらいお金があつて、両親が世間からどんな風に見られているかということも、何となくわかっていたような気がします。

私が子ども時代を過ごした昭和三〇年代は、何よりも暮らしが一番でした。一に暮らし、二に暮らし、三に暮らし、暮らしがい

ちばん偉い時代でした。子どもであつても勉強より遊びより暮らし優先で、暮らしのために店を手伝うのは当たり前のことでした。それは一人私だけでなく、商店街の子どもは皆そうだったのです。家業という言葉があるように、家の中にそれぞれ自分の役割がありました。

こんなふうにと書くと、私はいい子の代表に見えるかもしれませんが、決していい子ではありませんでした。家業が乾物屋という地味なくすんだ商売だったので、その反動で学校では受けない、笑わせたい思いが人一倍強かったような気がします。

当時大人気だった脱線トリオの由利徹の、腰をカクカク落とした歩き方を真似したり、雷門助六のあやつり人形を真似して見せたり、②その合間にはダジャレばかり言っていました。シャレ帳というノートを作って、そのノートに「井の頭公園にいったのかしら」とか、「ゴジラくんゴジラへどうぞ」とか、毎日欠かさずダジャレを書き込みました。思えば、私が生まれて初めて言葉と自覚的に向き合ったのが、このダジャレだったのです。

ダジャレが生まれて初めての言葉体験だなんて、ちつとも高尚じゃありませんね。でもこのダジャレ体験が、二十数年後、私が詩人となつてから思わぬところで息を吹き返すのです。そのことはあとでお話したいと思います。

さて、中学に入るとさすがにダジャレではクラスの笑いが取れなくなり、私のシャレ帳はいつの間にか机の抽出にしまわれっぱなしになっていきます。その代わりに始まったのが詩です。今でも詩を書くきっかけとなった出来事をはっきり覚えていいます。中学二年のときでした。

③新しく担任になられた志村嘉伸先生が私に、「ねじめは将来詩人になれるぞ」とおっしゃったのです。私はプロ野球選手になるのが夢でしたから、先生に「詩人になれるぞ」と言われてもちんぷんかんぷんです。それどころか詩人が一瞬死人に聞こえて、先生に「将来死人になれるぞ」と言われた気がして、この先生、いったい何を考えているのだろうと薄気味悪くなったほどです。私に「将来詩人になれるぞ」とおっしゃった志村先生は、私が班ノートに書きつけた詩が面白かったのです。ねじめは成績は悪いし、野球は大好きでまあ上手いがプロになれるというほどでもないし、まあ詩人にならなれるかもしれないと思われたのでしょう。私に詩人というものの実体がわかってきたのは、父親から詩人とはいかなる者かを教えてもらつてからです。

志村先生が褒めてくれた詩のタイトルは「店番」です。当時、私の家である乾物屋には住み込みの店員さんが二人いました。中学を出て地方からうちに就職した二〇歳前後の若い人たちです。その二人に混じつて中学生の私も店番をしていました。店番するときはグレーの店服を着ました。私も店番するときは店服を着なければなりません。乾物屋は服にニオイが付くうえに意外に汚れる仕事なので店服を着た方が便利です。両親の気持ちとして住み込み店員さんに対して私を特別扱いしないという意味もあつたのだと思います。私はグレーのその店服を着るのがイヤでイヤで仕方がなかったのです。店がくすんでいる上に店服までくすんだグレーなのです。気持ちほとんど沈んでいきます。そんな気持ちを、私は四行の詩に書きました。

店服を着ると

子どもでもない

大人でもない

宙ぶらりんの自分

「子どもでもない」というのは、中学生（中学生は世間的にはまだ子どもですよ）なのに大人並みに店服を着せられるということです。「大人でもない」というのは、店服を着ているのに中身は中学生だということです。私は店服を着ると子どもではなくなり、かといって大人でもなくなつて、宙ぶらりにされたような中途半端な気持ちになつて自分の居所がつかみかねてしまうのです。今思えばぜんぜん大した四行ではありませんが、中学生だった私は④この四行を書いたとき、店番がイヤでイライラした気持ちがスツと落ち着く感じがしました。店番に対するイヤな思いが減つたような気分でした。宙ぶらりと書いたことで、逆に宙ぶらりんでなくなつた感じがしました。

「詩人になれるぞ」のあとで、志村先生は「正確だ」と言つてこの四行を褒めてくれました。ねじめの気持ちに正確に書けている、ということです。先生のその言葉を聞いて、わたしは「あ、そうか」と思いました。当時の私は「あ、そうか」と納得しただけ

で、それを説明することはできませんでした。

でも今なら説明できます。私は自分の気持ちを表す正確な言葉を見つけたので、イライラした気持ちがスッと落ち着いたのです。イヤな思いが減ったのです。宙ぶらりんでなくなったのです。詩を書くことは正確な言葉を見つけることなのです。

ここで⑤言葉の正確さについてももう少し考えてみましょう。「店番」の詩で、私が「店番がイヤだ」と書いたらどうだったでしょうか。「店服を着たくない」と書いたらどうだったでしょうか。そういう感情はたしかに私の中にありましたが、しかし、店番はイヤでありながら一方で暮らしてました。一番大切な暮らしてました。店服は着たくないかったけれど、しかし、着ることによって私の暮らしは成り立っていました。だから「店番がイヤだ」と書いても、「店服を着たくない」と書いても、私の気持ちの片方しか表せていないことになります。それではダメなのです。正確ではないのです。

正確であるということは、本質のまわりをぐるぐる回ることではなく、本質をぎゅつと鷲掴みにすることです。「店番がイヤだ」や「店服を着たくない」は自分が思ったこと感じたことを正直に書いてはいるけれど、それはただ正直なだけであって、正確ではないのです。

言葉による表現を始めたばかりの人は、正直な言葉と正確な言葉を混同しがちです。たかぶった気持ちをたかぶった言葉で書いたり、悲しい気持ちを悲しい言葉で書くことが正確だと思ってしまうのです。でも、本当にそうでしょうか。人間ってそんなに単純でしょうか。

次に引用する詩は、私が選考委員をしている全国高校生詩のコンクールで二〇〇三年、大賞を取った宮崎祐子さんの「朝」という詩です。

朝

宮崎祐子

マッハで漕いできた自転車の

息切れが今頃きて

四階までの長い階段を登りおえると

肺のあたりに

重さと軽い痛みを覚えた

まだ冷たい朝の空気が残る

教室へ入ると

誰も来ていない

『一番乗り』

誰もいないのに

妙に緊張して

息を整えてから

席についた

深い深い溜息

二日間私を待っていた

冷たい机に頬をつける

均一に並んだ

同じづくりの机たち

ちようど三十九個

ああ あともうすこししたら

この似たような同じ机に
全然^{ちが}違う三十九人が座る
朝練^{あされん}をするテニス部の音
剣道部の声

黒板には

まだ金曜日の日付けと日直

月は4月で

私はまだこのクラスに慣れない

時間はじれたいくらいゆっくり進む

このまま誰も来なければいい

このまま一人でいたいのだ

私は目をつむる

この青く淋^{さび}しい朝

わたしはひっそりと息をする

いっそ A になってしまいたい。

ここに並んだ机、壁^{かべ}、黒板みたいに。

喋^{しゃべ}らなくて

笑わなくて

何も感じなくて

人が入ってきて 私と彼女はお互^{たが}いに少し
びっくりする

ああ

私はやっぱり無機物なんかじゃない

どうしよう、どうしようと心の中で思った

感情は揺^ゆれて

でも

内心とてもビクビクしているけど

「おはよう」

私は小さくあいさつをする

どうでしょう。最初から最後まで、何ともみごとに正確な詩ではありませんか。作者の宮崎^{みやざき}さんは当時熊本に住む高校三年生でした。この詩の主人公はクラス分けがあつて、まだクラスの間^まなと馴染^{なじ}んでいないので、朝早めに学校に行つて心を整えているのです。その心の微妙^{びみょう}なふるえが、この詩には正確に描^{えが}かれています。まず出だしの一行、「マッハで漕いできた自転車の」のスピード感がいいです。マッハのスピードで読み手の私たちは彼女の世界に引^ひつ張り込まれます。恐^{こゝろ}いようなスピード感です。現実には、もちろん自転車はマッハでなんか漕げはしない。でもこの詩の中ではマッハで漕ぐことの方が正確なのです。そうでないと彼女の書きたいことが正確に表現できないからです。そしてそちらがこの詩の真実になります。

次の行、マッハで漕いできたための、息切れは自転車^{のぼ}を降りてすぐではなく、四階までの長い階段を昇り終えたときにきます。

主人公は若いのです。そしてこの長い階段が、教室という日常的な場所を詩の中の場所に変わってゆきます。詩の中の教室は、ふだんの教室とはまったく別の場所、主人公の心のBをそのまま映し出す場所になります。ここで私の皮膚感覚に残ったのは、「二日間私を待っていた／冷たい机に頬をつける」というフレーズです。頬を机につけたときのひやりとした感覚は誰にでも記憶にあるはずです。私のような還暦を過ぎた人間にもあの感覚が蘇ってきます。このフレーズには、机が人間の裸の胸でもあるかのようなセクシュアルな響きがあります。学校の机に頬をつけたときの冷たさが私たちの記憶にしっかりと焼き付いているのは、それがセクシュアルな体験だからなのです。作者の宮崎さんはこのことを感覚として見きわめています。

さらにこの詩の正確さを象徴するようなフレーズがあります。それは「均一にならんだ／同じつくりの机たち／ちようど三十九個」というフレーズです。均一に、同じつくり、ちようど三十九個、という、目に見える寸法や数が、主人公の冷静で正確な視線を強調します。作者は「机に頬をつける」セクシュアルさのすぐ次に冷静で正確な視線を置くことで、ふつうの暮らしの中にある感情の※スリリングさを表現しきっているのです。

自分の言葉を生み出すというのはたやすいことではありません。私は運よく書くことを※生業として生きていますが、詩を書きはじめた頃は民芸品店の主だったこともあって、毎日少しでもいいから詩を書く時間を持って、いずれそのうち詩集を出せばいいと思っていました。こつこつと書いておればそれでもいいとも思っていました。ところが実際に詩を書いていると、自分の書いたこの詩の言葉が自分の感情にぴったり合っているのかどうかと、疑いばかり湧いてくるのです。たまに乗りがよくて筆がスイスイ運んでも、これが本当に私の書きたいことなのかと疑いが出てきます。自分は本当は何を書きたいのかという問いかけばかりが出てきます。

でも、あとになって考えると、この⑥疑いが大事なのです。自分の表現に疑いを持つとは、イコール自分の書こうとしている対象から距離を取ることです。自分の身の回りのことをそのまま書いても作品になりません。身の回りの世界と距離を持たなければ言葉は生まれてこないのです。宮崎さんの詩「朝」は、そのことを的確に教えてくれます。

※ 乾物屋Ⅱ干ししいたけなどの乾した食品を売る店。

高尚Ⅱ知性が高く気品があること。

スリリングⅡはらはらせるさま。

生業Ⅱ生活していくための仕事。

問一 ――①「今、世代を超えて言葉による自己表現をしたい人が増えています」とありますが、このような状況について筆者は

どのように考えていると思われますか。本文全体の流れも考えに入れて、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 表現としてはうまいが、言葉が自分から出てきた言葉ではないために、印象に残らないものが多くなっている。

イ 言葉による自己表現の裾野が急速に広がることにより、かつてないほど表現のレベルが上がってきている。

ウ すぐれた表現が生まれる可能性が高くなり、いいことだと思いが、自己表現がうまくできない場合も多く見られる。

エ とくに若い人の作品にすばらしいものがあつて、これからも公募賞の作品が良くなっていくことが期待できる。

問二——②「その合間にはダジャレばかり言っていました」とありますが、現在の筆者は当時をふり返って、どのように考えていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 当時大人気だったお笑いの人の動きを真似ると同時に、ダジャレを連発していたので、今思えば、決していい子ではなかった。

イ 毎日欠かさず、シャレ帳というノートにダジャレを書き込むという努力が、中学二年の時の「店番」という作品につながり、詩人になることができた。

ウ ダジャレが生まれて初めての言葉体験であるのは、少しも高尚ではないが、学校の友人には受けたし、笑わせることができてよかった。

エ 人を笑わせたいという思いが人一倍強かったが、結果として言葉と自覚的に向き合うようになり、その体験が詩人となつた後に生かされた。

問三——③「新しく担任になられた志村嘉伸先生が私に、『ねじめは将来詩人になれるぞ』とおっしゃったのです」とありますが、先生がこのようなことを言ったのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私の気持ちが正確に書けている「店番」という詩が面白く、詩人になれる可能性を感じたから。

イ 私がプロ野球選手になるのは無理だということがわかり、詩人を目指した方がいいと思ったから。

ウ 私が班ノートに書きつけた詩が面白く、正直な気持ちが書けていると思ったから。

エ 私のことをほめることによって、これから詩を書いていくきっかけを作りたいと思ったから。

問四——④「この四行を書いたとき、店番がイヤでイライラした気持ちがスッと落ち着く感じがしました」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいところを本文中から探し、二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五——⑤「言葉の正確さ」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉が自分の二種類の気持ちをしっかりと表していること。

イ 言葉がものごとの本当の姿をあらわすべく力強くつかんでいること。

ウ 言葉が自分の思ったこと感じたことこの中心部分を押さえていること。

エ 言葉が自分の正直な気持ちをうまく表していること。

問六「朝」という詩の中のAにあてはまることを、同じ詩の中から探し、抜き出して答えなさい。

問七 Bにあてはまることを、本文中からひらがな三字で探し、抜き出して答えなさい。

問八——⑥「疑いが大事なのです」とありますが、それはなぜですか。五十字以上六十五字以内で答えなさい。